

序 章 息子という経験——なぜ息子介護を問うのか

本書は、息子としての男性とはどのような存在か、また、どのような存在として理解されているのかを、親を介護する男性（息子介護者）の経験を通して考察したものである。

英語で、男性が「誰かの父親であること（being a father）」を指す単語に *fatherhood* がある。この *fatherhood* は「誰かの父親である」という記述的な意味を超えて、「父親とは普通こういうものである（what fathers should be like）」という規範的な理解——父性と呼ばれるもの——を指す場合もある。それになぞらえて言えば、本書の主題はいわばその息子版であり、*fatherhood* に対応させて造語するならば *son-hood*（息子であること、および「息子性」ということになるだろう）。

この *son-hood* を検討するために、なぜ息子介護者の経験に着目するのかについては後述するとして、ここではまず、本書が息子としての男性を問う理由について述べておきたい。端的に言えば、成人した男性の息子としての経験が、これまでほとんど語られずにいるからである。息子としての男性の不在は、夫としての男性、父としての男性の経験や、あるいは娘としての女性の経験への注目と比較してみると、よくわかる。

例えば、近年、「男性の生きづらさ」が各種メディアで取り上げられている。そこでいう「生きづらさ」とは、多くの場合、あるべき夫像・父親像の実現を迫られることで男性が感じる重圧である。

現代におけるあるべき夫像・父親像は、いわば新旧の理想像のハイブリッドである。「イクメン」や「カジダン」がもてはやされるように、家事・育児を積極的に担うことが家庭における男性の望ましいあり方になりつつある一方、家族を養える経済力をもつことを一人前とする旧来の考え方から男性が自由になったわけではない。だが、長時間労働が慣行化した現在の就労システムでは、働きながら家事・育児に思うように携わることが容易ではない。また、非正規雇用の増加といった就労状況の不安定化にもなつて、家族を養うどころか自活すら難しい男性も増えている。「男性の生きづらさ」とは、そのような就労条件・就労状況によって理想の実現が阻まれることにより、男性が直面するフラストレーションとして捉えられている（例えば多賀 2016；田中 2015）。

こうした「男性の生きづらさ」への注目は、理想的な規範的な男性像から外れることを余儀なくされる男性の経験への関心だと言える。ジェンダー化された主体としての男性の経験を言語化することを男性学と呼ぶとすれば、この関心は、男性的な関心と言つてよいだろう。

だが、男性的な関心がアカデミアに限らず共有されつつある一方で、ここで注目を集める男性の経験とは、夫か父親としての経験（あるいは、夫や父親になれない経験）であることがわかるだろう。本書で取り上げる息子としての男性は、ほとんど取り上げられないことがない。考えてみれば、

これは不思議なことである。男性にとつて息子であることは普遍的と言つてよいほどの経験である。夫や父親にならない男性はいるとしても、男性は男性である限り、ほぼ必ず息子として生きてきたに違いないからである。

息子不在の理由について、「おとなにとつてまず気がかりな家族は、自分がつくる家族（＝生殖家族）の方だからだ」と説明する人もいるかもしれない。たしかに、これも一理あるように思える。結婚していない人が増えているのは事実だが、それでも今のところ日本では既婚者が多数派である。二〇一〇年における生涯未婚率（五〇歳時点で一度も結婚したことがない人の割合）は男性が二〇・一％、女性が一〇・六％だが（国立社会保障・人口問題研究所『人口統計資料集』）、逆に言えば、五〇歳までの間に男性の八割、女性の九割が結婚していることになる。

しかし、生殖家族の方が重要だから息子としての経験は関心事にならない、という説明は、女性たちが娘としての経験を次々に言語化してきたことを考えると、必ずしも的確とは言えない。例えば、母娘関係、特に、母親の存在を重苦しく感じる娘の経験をとり上げた書籍は増え続けている（例えば田房 2012；信田 2008）。親との関係について、その否定的な側面も含めて赤裸々に語る女性の声が増えてくるのに比べると、息子としての男性の声がいかに鳴りを潜めているかがわかるだろう。ちなみに、娘としての経験を語る女性には、自分がつくる家族がいけないわけではない。それらの書籍に登場する娘たちのなかには、母の存在が夫との関係に侵食してくることへの苦悩を訴える女性もいるからである。女性によるこうした経験の言語化を考えれば、子どもや配偶者との関係

が第一だからこそ子としての経験に目が向かない、という説明は適當とは言えないだろう。

息子としての経験は、取るに足らないものなのか

息子としての経験の不在は、何を意味するのだろうか。

ひとつの可能性として、それが当の男性にとつて取るに足らないもの、敢えて注意を払うほどのものではないから、という推論もできるかもしれない。例えば、「男性の生きづらさ」として主に取り上げられる夫や父親として経験する重圧とは対照的に、息子として経験する重圧は、男性にはほとんどありえないのではないか、という可能性である。

だが、このような推論はおそらく妥当ではない。むしろ、息子として経験する重圧は、夫や父親として経験する重圧以上に大きくなる可能性すらある。それを示唆するのは、息子による親への虐待の多さである。要介護高齢者に対する家族による虐待の加害者のなかで、息子が占める割合は突出して多い（厚生労働省『平成二六年度高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果』）。虐待加害者のツートップは息子と夫でどちらも「男性」だが、それでも、夫が占める割合（一九・六％）は息子のそれ（四〇・三％）の半分にも満たない。ちなみに、息子と同じ「子ども」である娘の割合（一七・一％）は夫よりもさらに少ない。端的に言って、加害者のなかの息子の割合は不自然なほどに多い。

要介護の親に向き合うという特定の状況における男性のありようから、息子一般について語るこ

とに違和感を覚える方もいるかもしれない。だが、ある意味ではこの状況以上に、男性が息子としての自分を意識せざるをえない状況は、ないといえる。

例えば、家族介護のミクロなプロセスを詳細に検討した研究の多くが一貫して指摘しているのは、介護経験の内実は、誰が・誰を介護しているのか、つまり介護する者・される者の続柄によって、大いに異なる、ということである（例えば笹谷 2008）。だとすれば、男性が要介護の親に向き合うとき（あるいは向き合わざるをえないとき）、そこで経験されているのは抽象的な家族介護などではない。それは、息子として親を介護する経験であり、それは例えば、同じ男性である夫が要介護の妻に向き合う経験とも、あるいは、同じ子どもである娘が要介護の親に向き合う経験とも、同じとはいえない。

要介護の親に向き合うという、息子として以外に経験しようのない経験の場で、男性が虐待加害者になりうる蓋然性が不自然なほどに高いとすれば、その経験は、当の男性にとって非常な軋轢をもたらすものである、とは言えないだろうか。その意味で、息子として経験する重圧は、取るに足らないものなどではないはずである。

あとがき

息子介護について考え始めたのは、アメリカカの小さな町で大学院生をしている時でした。保存している限りのいちばん古い研究メモの日付は二〇〇七年四月なので、このテーマに取り組み始めて、もうすぐ一〇年になるようです。

わたしがこのテーマに深入りしたのは、「おとなの息子」が気になったことがきっかけでした。親なんて初めからいなかったかのようにしている男の人たち——「一人前」と言われている男の人たち——を見ていて、「中年の男性にとって息子としての自分って何なんだろう」と考え始めたのが、二〇代の半ば。そういう「おとなの息子」への関心の先で、息子介護というテーマに出会うことは必然でした。中年の男性にはたいいてい、既に要介護か、もうすぐ要介護の老年の親がいますから。

息子介護の本でありつつも「おとなの息子」を前面に押し出しているこの本は、だから、わたしにとって原点回帰ともいえるものです。もうひとつ、この本がわたしにとって原点回帰なのは、「男」というジェンダーに真正面から（とまではいなくても、斜め一五度くらいの向かいから）取り

組んでいるところですよ。

「男」が関心事になったのは「おとなの息子」よりずっと前（というより後者は前者への関心から派生しています）、わたしが四歳のときです。「男の子らしくするのがいや」どころか、「そもそも何が男の子らしいのかわからない」という不適応を抱えたわたしにとって、人生最初で最大の謎は「男」でした。

男性学はまさにその「男」を扱う学問ですが、わたしがそれに懐疑的なのは本書を読まればおわかりになるでしょう。私たちの階層秩序が維持されるメカニズムなど、男性学の理論はほとんど精緻になっている一方で、わたしにとって最も気になる「男」の謎は、そこでは語られていないように思ったからです。それは、「男は、自分が下駄を履かせてもらっていることを、どうしてここまで無視し続けられるのか」という謎でした。

その謎にとりつかれたのは、わたしの対人関係のせいかもしれません。わたしは、今も昔も友達のひとつが女性なのですが、「男のあんたはいいよね」と冗談めいた皮肉を言われることがありました。「この社会で優遇されてる男のあんたには、わからないよね」という意味です。それを繰り返し聞くうちに意識せざるをえなくなったこと——それは、自分がずっと下駄を履かせてもらって生きているということ、しかも、男らしくない「男の規格外れ」のようなわたしでも、男というだけでそれを履かせてもらえるということ、そして何より恐ろしいことに、男は、それを履かせてもらっていることに気づかず生活できてしまえる、ということでした。

そう、わたしたち男は、履かせてもらっている下駄にすこぶる無頓着なのです。われわれが履きなれた下駄の高さや形状が、フェミニズムの登場によって「これでもか」というほどに暴かれていするのに、それに対する男たちの反応は、いまいちピンとこないでいるか、「いやいや、男だつてしんどいんだよ」と、「生きづらさ」のジェンダー平等（だけ）は熱烈に主張して煙に巻くか、はたまた「うっさい、黙れ」と逆ギレしてみせるか、ほとんどがそのどれかのように思えます。

わたしが知る限り、「下駄に気づかず済んでいるのはなぜか」に答える男性学はありません。もちろん、男性学は「はい、われわれは優位に立っています」「そのことは十分意識しています」と声高に述べてはいますが、いちばん熱くなるのはたいてい「男ってこんなに大変なんすよ」という部分でしょう。そして何より、「優越性の自覚」と「大変さの訴え」は、いわばそれぞれ別のお皿に載せてサーブされており、ひとつの枠組みのなかに整合的に位置づけられていないように感じました。

「四つ子」の魂よろしく、原点回帰したこの本のなかでやりたかったのは、この二つをワンプレートに載せてサーブすることでした。そうしてできたのが、終章です。つまり、男性性を今のものとして理解し説明する、まさにそのことによって隠蔽される男の下駄、ジェンダー不平等があるのではないか、ということ、したがって、そのような男性性を前提にして何かを語る限り、それがたとえ男性性（の抑圧）からの解放の主張であっても、男の下駄は陰に隠れてしまうのではないか、ということでした。

もちろん、やりたかったことと実際にやれたことは別です。ワンピースには載せてみたものの、実は生焼け、生煮えで食えたもんじゃないんじゃないか、とか、そもそもこのお皿は、お皿として使っているものだったんだらうか、とか、諸々の不安に駆られながらも、あとは舌の肥えた厳しいお客さまのジャッジをどきどきしながら待つばかりです。